

特別記

追悼——ネッロ・サンティ

イタリア・オペラの最後の巨匠、ネッロ・サンティが2月6日、チューリヒで亡くなつた。88歳米寿で世を去つた彼は、「オペラの巨匠」を絶に描いたような指揮者だった。1993年から1999年まで読売日本交響楽団に、2001年からはNHK交響楽団にたびたび客演、日本でもすっかりおなじみのマエストロだった。

生きること=音楽だつた最後の巨匠

文=中東生
Text-Shiroo Nakao

作曲家の理解のため作曲科へ

ネッロ・サンティは「音楽を愛していだ」というよりも、生きること=音楽だつた。父親が趣味で集めていたクラシック音楽のレコードを聴いて育ち、4歳のころ、アドリアに来たヴエルディ『リゴレット』の巡回公演を観て、指揮者を志す。こ

タリア国内外で振り、リハーサル時にオーケストラのなかで欠席者がいると、その楽器を代わりに弾いていたため、「何でも弾けるマエストロ」が育つた。

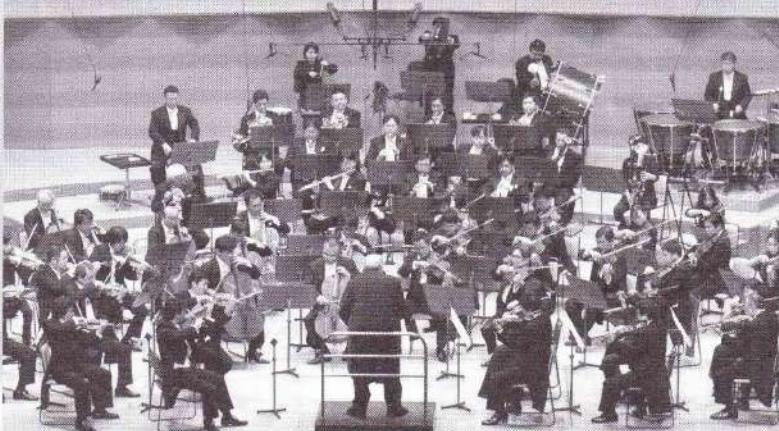
1956年にリヨンでブッチーニ『蝶々夫人』を振つたときの主役、ミキコ・イワイさんがチユーリヒ歌劇場でも蝶々さんを歌つた際に、サンティを

ヴエルディ『運命の力』に推薦したため、1958年チユーリヒにデビューハー、地元を確立した。やがてチユーリヒ歌劇場専属のバレリーナと恋に落ち、チユーリヒに居を構える。いつもいつしょに活動していた愛妻と3人の子供、末には4人の孫に恵まれ、家族を愛したが、彼の頭の中にはまず音楽があつた。

「音楽はぜいたくだ。生死にかかわるものではない。だからこそ、一流の音楽を提供しなければ、それはただのむだにならぬなかつたため、キングコンングのような巨体で譜面台や楽器を動かし始めてみんな驚愕させたが、その晩の成功により、次の共演からは対向配置が恒例となつた。ハンブルク州立歌劇場でも、舞台上に全裸のモデルが出る演出の際、リハーサル中に楽団員たちが裸を視界に入

音楽のために妥協なし

最高レヴェルの音楽へ到達するためには、小学生のころの姿勢は、指揮者になつても変わらなかつた。楽団員や歌手のミスも、怠慢から発生したものだと判断すると容赦ない。公演中に携帯電話が鳴つたときも、音楽を止めて短く鋭くたしなめた。有名でも自分の声ばかり聴か



サンティが日本最後の演奏となつたのは、2014年11月26日、NHKホールで行われたN響定期でのメンデルスゾーン『交響曲第4番(イタリア)』だ。©NHK交響楽団

語つていた。彼にとつてラジオやレコードこそが真の学校だつたのだろ。 彼が敬意を抱く作曲家たちの意図を理解するため、指揮科ではなく、パドヴァ音楽院の作曲科で学んだ。そして20歳のときに、念願のヴエルディ『リゴレット』で指揮者デビューをほたす。その後はイ

タリア国内外で振り、リハーサル時にオーケストラのなかで欠席者がいると、その楽器を代わりに弾いていたため、「何でも弾けるマエストロ」が育つた。

1956年にリヨンでブッチーニ『蝶々夫人』を振つたときの主役、ミキコ・イワイさんがチユーリヒ歌劇場でも蝶々さんを歌つた際に、サンティを

ヴエルディ『運命の力』に推薦したため、1958年チユーリヒにデビューハー、地元を確立した。やがてチユーリヒ歌劇場専属のバレリーナと恋に落ち、チユーリヒに居を構える。いつもいつしょに活動していた愛妻と3人の子供、末には4人の孫に恵まれ、家族を愛したが、彼の頭の中にはまず音楽があつた。

「音楽はぜいたくだ。生死にかかわるものではない。だからこそ、一流の音楽を提供しなければ、それはただのむだにならぬなかつたため、キングコンングのような巨体で譜面台や楽器を動かし始めてみんな驚愕させたが、その晩の成功により、次の共演からは対向配置が恒例となつた。ハンブルク州立歌劇場でも、舞台上に全裸のモデルが出る演出の際、リハーサル中に楽団員たちが裸を視界に入

れよつとして集中しないので、ピットの端に立たせて目の保養をさせてから稽古を再開したという(一)。読み替え演出で作品を壊す演出家も避けた。以前、「ノーカット版の演出なのに、カットを施して残念だった」という批評があつたが、『キャストの力量が不十分なのにノーカット版にこだわるのは音楽に失礼』と

せたがる歌手との共演は避け、無名でも自分の考える音楽を再現してくれる音楽家を推した。音楽性がない歌手も成功に導き、立派な声を持たない歌手でも、オーケストラを寄り添わせ、自分の音楽を織り上げた。自分の娘ばかり使つたがるという陰口もあるが、「自分の音楽を表現してくれる歌手がいるのに、目の前の歌手が自分の棒のように歌つてくれないと健康に悪いから」と、ミラノ・スカラ座など、いくつもの歌劇場で、キャステイティングのために出演を辞した。そのような姿勢は音楽界で「出世」していく妨げになるためにマネジメントもむずかしく、最後は息子がマネジャーを務めた。それらは身内びいきではなく、彼の音楽を実現する手段だつたのだ。

NHK交響楽団との本番前の会場リハーサルで、対向配置を望んだのに叶えられなかつたため、キングコンングのような巨体で譜面台や楽器を動かし始めてみんな驚愕させたが、その晩の成功により、次の共演からは対向配置が恒例となつた。ハンブルク州立歌劇場でも、舞台上に全裸のモデルが出る演出の際、リハーサル中に楽団員たちが裸を視界に入

れよつとして集中しないので、ピットの端に立たせて目の保養をさせてから稽古を再開したという(一)。読み替え演出で作品を壊す演出家も避けた。以前、「ノーカット版の演出なのに、カットを施して残念だった」という批評があつたが、『キャストの力量が不十分なのにノーカット版にこだわるのは音楽に失礼』と

いう当然の決断だったのだ。

前述のイワイさんなどのこともあったのか、音楽的な義理も通した。どの歌劇場から来日公演を振るオファーが来て、「初来日はアーネ・ディ・ヴェローナのおかげだったが、日本の一流オーケストラに客演する立場になつたまでは、いかなる歌劇場とも来日するべきではない」と断っていた。そんな部分が日本と呼応するのか、日本の礼を尊ぶ食文化や伝統、そして日本人に敬愛を抱いていた。

歳祝賀コンサートも計画

「指揮は人に教えられるものではない」という考え方で、指揮科の教授やマスタークラス等を引き受けなかつたが、才能

のある若手がリハーサルを見学することは援助した。彼は音楽伝統継承の危機を憂いていたのだ。彼の最後の指揮は、2019年3月19日、チューリヒ歌劇場でのドニゼッティ『ランメルモールのルチア』だったが、私たちはどのようにその伝統を受け継いでいけるだろうか。

90歳祝賀コンサートの企画も始まつていた矢先の「老衰」、「大往生」といえる突然の死は、「指揮台で死にたい」と望んでいたサンティを、盟友たつたカルロ・ベルゴンツィが、レナータ・テバルディ、アルド・プロッティ、ボナルド・ジャイオッティのキャストでヴエルディ・オペラを上演するために、天国へ呼んだからかもしれない。

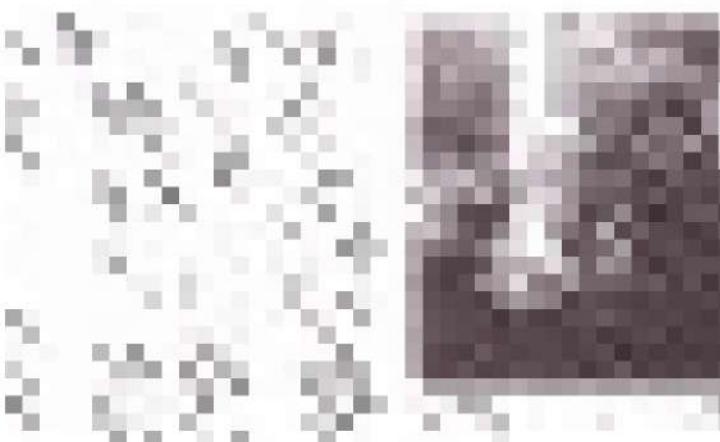
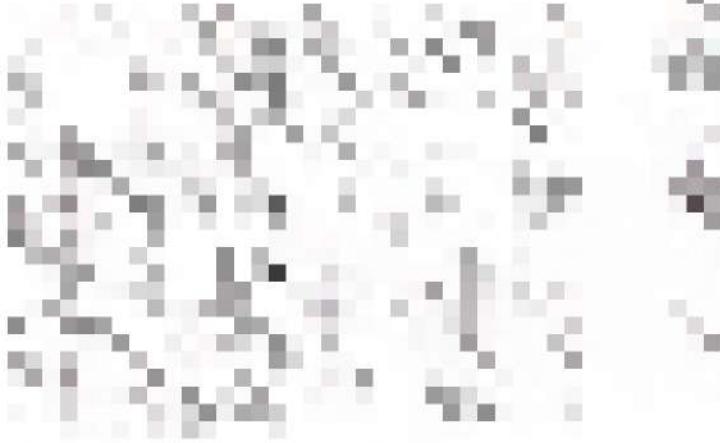
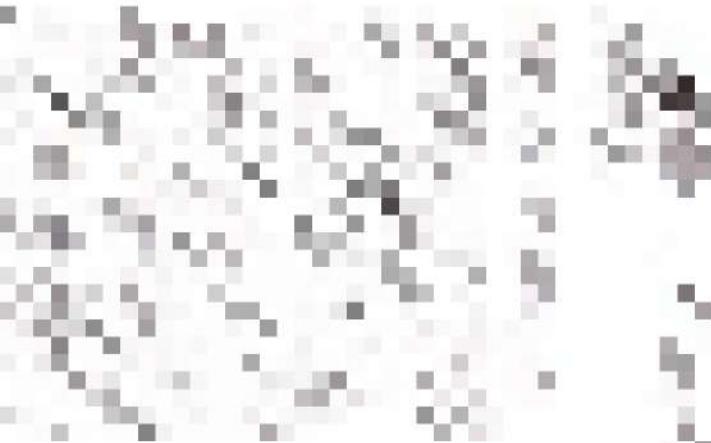
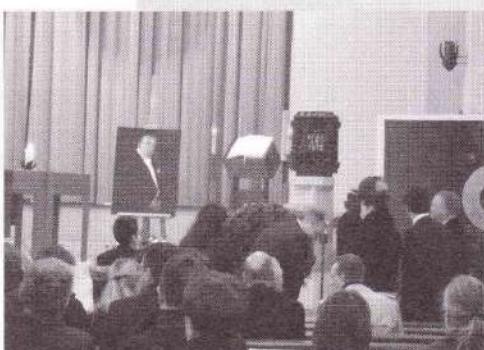
教会を埋めつくした参列者、サンティの葬儀

ネッポ・サンティの葬儀が、故人が敬意を抱いていたロッシーニの228歳の誕生日である2月29日、チューリヒのエルローザー教会で行われた。新型コロナウイルスの流行のため、出身地であるアドリア市長をはじめ、レオ・ヌッチやルッジェーロ・ライモンディらが、イタリアから出られず参列できなかつたが、それでも教会を埋めつくした参列者を、チューリヒ歌劇場の首席奏者たちによる室内楽が包み込み、すべてを見透かしているような視線が在りし日のマエストロを鮮明に思い出させる写真が、様子を見守っているようだった。45年間友情を育んだ神父がドイツから駆け付け、70歳記念に本を出版した音楽学者のマティアス・フォン・オレッリがサンティの人生と音楽観を語った。「音楽にいちばん大切なのはスタイルを守ること。あとはそのときの偶然に左右されるもの」と言った言葉や、ドニゼッティ『愛の妙薬』のレチタティーヴォをピアノで伴奏した際、アディーナがトリスタンの物語を読む場面で、

ワーグナー《トリスタンとイゾルデ》を弾いたとか、懐かしいエピソードに微笑や涙を誘った。アドリア市立歌劇場にサンティの名を冠するというニュースが舞い込んだ。小さな街だが、サンティ・スタイルのメッカを目指してほしい。

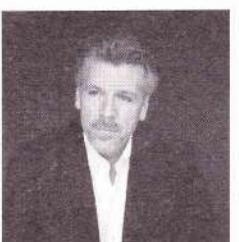
(中東生)

故人の写真が飾られた祭壇
©中東生



トロ・サンティに会つた時、彼はアレク

サンダー・ペレイラ総裁時代のイタリアン・レバートリーを固めており、歌手たちはみな彼から指導を受けること、其演ぎ



© Jiyang Chen

レオ・ヌッチ(バリトン歌手) Leo Nucci, Baritone

マエストロ・サンティは私がいちばん多く其演した指揮者です。1979年にハンブルク州立歌劇場のヴエルディ『椿姫』でデビューしたとき、そして翌年、チューリヒ歌劇場へヴエルディ『ルイサ・ミラード』でデビューしたときもサンティの指揮でした。メトロボリタン歌劇場(MET)で歌うときは、サンティのアパートを借りるほど家族ぐるみの友情

を育み、彼がMETで振らなくなつたので、私も2004年の『ルイサ・ミラー』以来、行くのをやめました。それはただの友情ではなく、いつしょに働く楽しさが上々にありました。たくさんのことを行かれて、たくさんのかなげな言葉や歌でキューをしました。そして、全絶譜のすべての瞬間を把握し、歌手全員の歌のみならず、オーケストラのすべての楽器に対しても、必要なときには言葉や歌でキューを出します。並外れています！「ネッコ・ザ・グレイ」と誰かが名づけたように、彼は音楽家のなかの音樂家であり、他の追随を許さない、歌手のための指揮者で、偉大な劇場人であり、全世界のために貢献した人でした。私は『エルナーニ』、『ツカーニ』、『トスカ』、『シモン・ボッカネグラ』をこれから学び、消化し、共演できたことを心から感謝しています。そして、もっとも感謝しているのは、この特別な音楽観などのよう心得られるのかという秘訣を、少しでもかいま見ることができたことです。彼はそのたくましい才能を見大に分け与え、音楽と劇場の魔法を創造することができた人でした。

ネッコ・サンティ Nello Santi

1931年9月22日 イタリア・ヴェネト州のアドリアで、日用品・食料品店を経営するクラシック音楽愛好家の家に生まれる。

1934年 ベルディ『リゴレット』を観て、指揮者を志す
1951年12月19日 バドヴァのベルディ歌劇場に、志のきかげとなつた『リゴレット』で指揮者デビュー

1953年 ベニヤミーノ・ジーリのコンサートを指揮、1956年にはスペインツアーに同行する

1958年 チューリヒ歌劇場に『運命の力』(ドイツ語版)でデビュー。その後60年以上にわたり、8人の総裁と90以上のプロダクションを創り上げることになる
1960年 ウィーン国立歌劇場にベルディ『アイーダ』でデビュー後、当歌劇場では17演目79公演を指揮した。同年、ヘルベルト・フォン・カラヤンに招かれて、ザルツブルク音楽祭にもデビューする

1962年 ニューヨークのメトロボリタン歌劇場にデビューする。以後40年間で30シーズン客演した

1970年 アレーナ・ディ・ヴェローナにブッチャーニ『マノン・レスコー』でデビューする。マノンはマグダ・オリ维エー、デ・グリューはフランシッド・ドミンゴ

1971年 ミラノ・スカラ座にブッチャーニ『蝶々夫人』でデビューする
1974年 パリ・オペラ座にヴエルディ『シチリア島の夕べの祈り』でデビュー

1986年 この年から10年間スイスのバーゼル放送交響楽団首席指揮者を務める

1989年 アレーナ・ディ・ヴェローナ来日公演、ヴエルディ『アイーダ』で初来日

1990年 ローマ歌劇場来日公演、ブッチャーニ『トゥーランドット』で再来日後、1993年から読売日本交響楽団に、2001年からはNHK交響楽団に定期的に客演

2020年2月6日 チューリヒにて死去

前述の歌劇場のほか、コヴェント・ガーデン王立歌劇場、サンフランシスコ歌劇場、ハンブルク州立歌劇場、バイエルン州立歌劇場、コロン劇場、リセウ歌劇場、フェニーチェ歌劇場、ケルン歌劇場、ケルン・ギュルツェニッヒ管弦楽団、オランジュ音楽祭、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、ニース歌劇場、マルセイユ歌劇場、リサボン歌劇場などにも定期的に出演した。イタリア共和国から、カヴァリエーレ、グランデ・ウッフィチャーレ両厚勞勲章を、スイスではHans-Georg-Nägeliメダル、STAB賞、チューリヒ市文化賞を授与されている。

別に行ひうと思っていますが、サンティの死と共に私も引退します。

アレクサンダー・ペレイラ (チューリヒ歌劇場前総裁／任期1996—2012)

Alexander Pereira, Previous director of Opernhaus Zürich

20年以上もマエス

トロ・サンティと、毎年一つ以上の新演出を世に送り出せたのは、私にどうでも、そ



© Teatro alla Scala

妙薬》の記憶は、僕のキヤリアのなかでもっともすばらしい公演の一つとして、僕の心のなかに永遠に刻まれるだろう。



© 中東生

ハンナ・ヴァインマイスター (バイルハーモニア・チューリヒ第1管弦樂團 スター) Hanna Weinmeister, First concertmaster of Philharmonia Zurich

ちょうどいま、2月29日のマエストロ・サンティの葬儀で弾く四重奏の練習が終わつたところです。マエストロの特別な人柄とインスピレーションを与えてくれるリハーサルを、20年間も享えてきた感謝を込めて、シユーマン(ゾーイ編)「クラリネット五重奏曲『夕べの歌』」と、ヴエルディ「弦楽四重奏曲」、ブッチャーニ「弦楽四重奏曲《菊》」、ロッシーニ「弦楽四重奏第2番」を選びました。マエストロはすごい耳を持っていて、小さなミスでも気づき、次にそれを弾くと、ニヤッとこちらを見たりします(笑)。彼は一部分を極端に詰めて練習するので、別の部分まで極める時間が残らないのですが、「こんな高いレヴェルを求められているのか」と認識することで、練習できなかつた

場所も同じレヴェルに達せなきやいけないと自戒するのです。彼は私たちを別世界・別の時代に連れて行つてくれる気がしました。彼みたいな指揮者にはもう二度と会えないでしょう。

中東生
巨匠が一人去つた。僕たちのドニゼッティ『愛の



Rolandino Villazon, Tenor

20年間で初めてミラノ・スカラ座と行った日本には特

年

に

お

は

い

る

よ

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な

い

う

な